

九州天皇家論 6章 倭建の歌

赤い満月

倭建の白鳥陵

倭建が遠征したのは九州天皇家の古代国である。古事記、常陸國風土記から取り上げてみよう。

東の方十二道

爾に天皇、亦頻(し)きて倭建命に詔りたまひしく「**東の方十二道(とをまわりふたみち)**の荒夫琉(あらぶる)神、及摩都樓波奴人等(まつらはぬひとども)を言向け和平(やは)せ。」とのりたまひて、吉備臣等の祖、名は御鉏友耳建日子(みすきともみみたけひこ)を副へて遣はしし時、**比比羅木(ひひらぎ)**の八尋矛(やひろほこ)を給ひき。」
(古事記・景行記)

この時、景行天皇は「東の方十二道」と述べている。まず倭建は伊勢神宮へいく。

伊勢・倭比売命…尾張国・美夜受比売…相武国・国造…走水…弟橘媛入水…蝦夷討伐…足柄(阿豆麻)…甲斐国…科野国…尾張国・美夜受比売…伊服岐能山…玉倉部の清水…當藝野…尾津の前…三重村…能煩野

走水とは関門海峡である。まさに水が走る海峡である。尾張国は九州天皇家の都、田川市に存在した古代国である。古事記の倭建の記録をさらに詳述したのが常陸國風土記である。古事記も風土記常陸国も同じ九州天皇家の歴史書である。常陸國風土記の倭建の足跡を追ってみよう。

常陸國

國郡の舊事(ふること)を問ふに、古老の答へていへらく、古は、相模(さがむ)の国足柄の岳坂(やまさか)より東の諸の縣(あがた)は、**忽(す)べて我姫(あずま)の国と称(い)ひき**。是(こ)の当時(とき)、常陸と言わず。唯、**新治・筑波・茨城・那賀・久慈・多珂**の国と称(い)ひ、各(おのもおのも)、造(みやつこ)・別(わけ)を遣はして檢校(おさ)めしめき。

其の後、難波の長柄の豊前(とよさき)の大宮に臨軒(あめのしたしろ)しめしし天皇のみ世に至り、高向臣(たかむこのおみ)・中臣幡織田連(なかとみのはとりだのむらじ)等を遣はして、坂より東(ひがし)の國を惣領(すべをさ)めしめき。時に、我姫(あずま)の道、分かれて八(やつ)の國と為り、常陸の國、その一(ひとつ)に居れり。
(常陸國風土記)

- (1) この地方は古来「我姫(あずま)の國」と呼称されてきた。
- (2) その後、「相模」「武蔵」「上総」「下総」「上野」「下野」「常陸」「陸奥」の八つの國に分かれた。
- (3) 常陸國には新治・筑波・茨城・信太・行方・香島・那賀・久慈・多珂・白壁・河内と十一の郡があった。

これらの郡に、倭建の逸話が残る。常陸國は九州天皇家の古代国である。

常陸國総記

倭建の天皇、東(あずま)の夷(えみし)の国を巡狩(めぐりみそな)はして、新治の縣(あがた)を幸過(すぎいで)しに、國造(くにのみやつこ)毘那良珠命(ひならすのみこと)を遣はして、新たに井を掘らしむるに、流泉(いずみ)浄(きよ)く澄み、いと好愛(めずら)しかりき。時に、乗輿(みこし)を停めて、水をめで、み手を洗ひたまひしに、御衣(みけし)の袖、泉に垂てひじぬ。便ち、袖を漬(ひた)す義(こころ)によりて、此の國の名と為せり

信太の郡

古老にいへらく、倭武の天皇、海辺を巡り幸して、乗浜に行き至りましき。時に、浜浦(はま)の上に多(さわ)に海苔を乾せりき。是に由りて能理波麻(のりはま)の村と名づく。

茨城の里

郡の東十里に桑原の岳あり。昔、倭武の天皇、岳の上に停留(とど)まりたまひて、御膳(みつけもの)進奉(たてまつ)りし時、水部(もひとりべ)をして新たに清井(み)を掘らしめしに、出泉(いずみ)浄(きよ)く香(かぐわ)しく、飲み喫(くら)ふに尤好(いとよ)かりしかば、勅(みことのり)したまひしく、「能く淳(たま)れる水かな」とのりまひき。是によりて、里の名を今、田餘(たまり)と謂ふ。

行方の郡

倭建の天皇、天の下を巡狩(めぐりそこな)はして、海の北を征平(ことむ)けたまひき。是に、此の國を経過(す)ぎ、即ち、槻野(つきの)の清泉(しみず)に頓幸(いでま)し、水に臨(のぞ)みてみ手を洗い、玉もちて井を榮(さきは)へたまひき。今も行方の里の中にありて、玉の清井といふ。

郡より東北のかた十五里に當麻(たぎま)の郷(さと)あり。古老のいへらく、倭武の天皇、巡り行でまして、此の郷を過ぎたまふに、佐伯(さへき)、名は鳥日子(とりひこ)といふものあり。其の命(みこと)に逆らひしに縁(よ)りて、隨便(すなわ)ち略殺(ころ)したまひき。即て、屋形野(やかたの)の帳(とばり)の宮に幸(い)でますに、車駕(みくるま)の経(へ)ける道狭く地深淺(つちたぎたぎ)しかりき。悪しき路の義(こころ)を取りて、當麻(たぎま)と謂う

此より南に相鹿(あふか)・大生(おほふ)の里あり。古老のいへらく、倭武の天皇、相鹿の丘前(をかざき)の宮に座(いま)しき。此の時、膳炊屋舎(おほひどの)を浦濱(うらべ)に構え立て、舁(はしぶね)を編みて橋と作(な)して、御在所(みましどころ)に通ひき。大炊(おおひ)の義(こころ)を取りて、大生(おほふ)の村と名づく。又、倭武の天皇の後(きさき)、大橋比売命(おほたちばなひめのみこと)、倭(やまと)より降(くだ)り来て、此の地に参り遇(あ)ひたまひき。故、安布賀(あふか)の邑と謂う。

香島の郡

古老のいへらく、倭武の天皇のみ世、天(あめ)の大神、中臣の巨狭山命(おほさやまのみこと)に宣(の)りたまひしく、「今、御舟(みふね)を仕へまつれ」とのりたまひき。

久慈の郡

古老のいへらく、郡の南、近く小さき丘あり。形、鯨に似たり。倭武の天皇、因りて久慈と名づけたまひき。此より良のかた二十里に助川(すけかわ)の駅家(うまや)あり。昔、遇鹿(あふか)と号(なづ)く。古老のいへらく、倭武の天皇、此に至りましし時、皇后、参り遇ひたまひき。因りて名づく。

多珂の郡

其の道前(みちのくち)の里に飽田(あきた)の邑あり。古老のいへらく、倭武の天皇、東の垂(さかい)を巡りまさむとして此の野の頓宿(やど)りたまひしに、人あり。奏(まお)しく「野の上に群れたる鹿、数なく甚多(いとさわ)なり。其のそびゆる角は、蘆枯(かれあし)の原の如く、其の吹(いぶ)く気を比ふれば、朝霧の丘に似たり。又、海に鮑あり。大きき八尺ばかり。また諸種(くさぐさ)の珍しき味ひ、遊漁(うをのあそび)の利(さち)多し」とまをしき。是に、天皇、野に幸して、橘の皇后(おほきさき)を遣りて、海に臨みて漁(す

など)らしめ、捕物の利(さち)を相競ひて、山と海の物を別き探(さぐ)りたまひき。

倭建の白鳥陵

倭建は三重村で亡くなった。倭(やまと)國から駆けつけた后・子どもたちは陵を作る。その後、倭建は白鳥となって「河内国・志磯」に飛ぶ。そこに陵を作る。この陵が「白鳥の御陵」である。九州天皇家で「河内国」は小倉南区である。そこに倭健の「白鳥の陵」が存在する。小倉南区は九州天皇家の都であった。ここには九州天皇家の天皇陵が存在する。倭建の陵ここに存在する。倭建が白鳥となって「河内(小倉南区)」まで飛んでいった。

私が「倭建陵」と推定する古墳は茶毘志山古墳である。

茶毘志山古墳

「曾根平野中央の丘陵上に位置するこの古墳は、五世紀後半から末にかけて造られた前方後円墳である。現代、後円部しか残っていないが、全長54メートル[推定]、後円部径約30メートル後円部高約12メートル、前方部先端の幅約44メートル[推定]で市内第2位の規模をもつと考えられている。墳丘は、地山を整形して盛り上げた土砂を叩き締め、三段に築成している。墳丘の周囲に濠があったという説もある。又、この古墳の下には、弥生時代後期終末頃の柱穴や土器片が確認されており、弥生時代の遺跡の上に造られた古墳である。

この古墳の特徴は、後円部径に対する前方部先端の幅が、基底部では大きく広がるが二段目は著しく狭長な形態[シャモジ形]になることである。これは段築を強調するためとされている。

未発掘のため主体部は不明であるが、前方部が削られた際、石室の一部が露出しており、古式の横穴式石室と考えられている。遺物としては、円筒埴輪片や土師器片、土製模造鏡が採集されている。曾根平野には、市内の前方後円墳の大半が集まっているが、その中でも茶毘志山古墳は初期の造営と考えられており、この地域を支配した首長層の成立を解明していく上で重要な遺跡である。



この古墳は最も初期のものである。河内國の陵で最も古くに作られたと記録される陵は倭建の陵である。造営年は古く、毘志山古墳は市内第二の規模である。

その中でも茶毘志山古墳は初期の造営と考えられており、市内第2位の規模である。

この古墳の特徴は、後円部径に対する前方部先端の幅が、基底部では大きく広がるが二段目は著しく狭長な形態〔シャモジ形〕になることである。

この特徴ある形は何かを表しているようである。それは「白鳥」ではないか。「白鳥」となって「能煩野」から「河内國」まで飛んできた「倭建」の陵は、その形を「白鳥」をイメージして作られた。よって「白鳥の陵」と呼ばれた。倭健の陵は「白鳥」になって飛び立ったからその名前となっただけでなく、陵そのものが白鳥の形をしているのであろう。

日本書紀・仲哀紀

冬十一月乙酉の朔に、群臣に詔して曰はく、「朕、未だ弱冠に達ばずして、父の王、既に崩りましぬ。乃ち神靈、白鳥と化りて天に上ります。仰望びたてまつる情、一日も息むことなし。是を以て、願はくは白鳥を獲て、陵域の池に養はむ。因りて、其の鳥を觀つつ、願情を慰めむと欲ふ」とのたまふ。則ち諸國に令して、白鳥を貢らしむ

この記事から倭建の陵には池があったことがわかる。茶毘志山古墳には「墳丘の周囲に濠があったという説もある。」と云う。茶毘志山古墳が倭建を祀った白鳥陵であらう。